

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語の「役割語」：日本語との対照研究

著者	福畠 教隆
雑誌名	CLAVEL
号	2
ページ	70-86
発行年	2012-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001247/

スペイン語の「役割語」*

—日本語との対照研究—

福嶋 教隆

キーワード：役割語，スペイン語，対照研究，音声言語

1. はじめに

「役割語」とは，金水（2003），金水・編（2007），金水・編（2011）などによって提唱された概念で，「特定のキャラクターと結びついた，特徴ある，架空の言葉づかい」を指す。¹ 日本語においては，「オッホン，これはわしの大発明なのじゃ」のような「博士語」，「ごめん遊ばせ。よろしくってよ」のような「お嬢様語」，「拙者の存ぜぬことござる」のような「武家語」，「それ高いある。負けるよろし」のような「異人語」などがあるとされている。

この概念に当たる形式が日本語以外の言語にも存在するのかという問題も，研究が進みつつある。英語については，山口（2007），Gaubatz（2007），ドイツ語については細川（2011），韓国語については鄭（2007），鄭（2011），恩塚（2011）などの考察が発表されている。

本稿では，これらの先行研究を踏まえて，スペイン語（イスパニア語）に「役割語」が認められるか，また，日本語の「役割語」がスペイン語ではどのような形で翻訳されるのかについて考察する。

この問題を考察するに当たり，日本語からスペイン語に訳された漫画，小説を主な資料に用い，原作の「役割語」がどのように翻訳されているかを検討する。スペインでは日本の漫画，アニメが非常に人気があり，出版物も豊富である。

* 本稿は，2010年7月17日に大阪大学にて開催された土曜ことばの会2010年度7月例会にて行なった口頭発表，および2011年5月28日に京都外国語大学にて開催された日本・スペイン・ラテンアメリカ学会第23回大会にて行なった講演の内容を発展させたものです。貴重なコメントを下さった参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

¹ 金水（2003: 205）によれば，「ある特定の言葉づかいを聞くと特定の人物像を思い浮かべることができるとき，あるいはある特定の人物像を提示されると，その人物がいかにも使用しような言葉づかいを思い浮かべることができるとき，この言葉づかいを『役割語』と呼ぶ」と定義される。

Gallego (2003), 金関 (2010), 金関 (2011) を参照。また日本文学の翻訳も、古典から現代作品に至るまで、かなり盛んに行なわれている。拙稿 (2009) 参照。併せて、スペイン語圏で発行されたその他の漫画なども資料にする。

2. 「博士語」

(1) は英語から訳された漫画, (2) は日本で刊行された漫画と, そのスペイン語版の一節である。

(1) Doctor: ¡Mi robot tendrá un cerebro dentro de poco! ¡Conquistaré el mundo! (博士: 〈直訳。以下同様〉私のロボットはまもなく脳を持つだろう! 私は世界を征服するのだ!) (Hanna Barbera, “Locos por el surf”, *El Oso Yogui*, 12, 1987, Planeta, Barcelona, p.16)

(2) a. クローバー博士: 過去は全ての人間のものじゃ 全てを受け入れるべきじゃ! (尾田栄一郎『ワンピース』41, 2006, 集英社)

b. —El pasado es herencia de toda la humanidad... ¡Debe ser aceptado en su totalidad! (過去は全ての人間の遺産だ...。それはその総体として受け入れられるべきだ!) (*One Piece* 41, 2007, Planeta, Barcelona)

(3) a. 鶴仙人: この大会もなさけのうなったもんじゃ
亀仙人: あいかわらずセンスのないやつじゃ! (鳥山明『ドラゴンボール』10, 1987, 集英社)

b. —Veo que este torneo ha bajado mucho de nivel.

—¡Continúas teniendo un pésimo sentido del humor! (「このトーナメントは水準が非常に下がったようだ」「お前は最低のユーモアのセンスを持ち続けているなあ!」) (*Dragon Ball*, 10, 1995, Planeta, Barcelona)

(1)は眼鏡をかけ、髭を生やし、白衣を着た、漫画で典型的な「博士」スタイルの男性が、制作中の人造人間を前に独白する台詞である。内容的にも「世界征服をたくらむ」という、悪い研究者のステレオタイプだと言える。しかし表現は全て無標で、「博士語」らしき要素は皆無である。

(2a)はあご髭を蓄えた白髪の博士が弟子たちを前に語る台詞で、「じゃ」という

文末詞が特徴的である。しかしそのニュアンスはスペイン語訳(2b)には移されておらず、この文を読んだだけでは、発話者の社会的立場はおろか、年齢・性別も分からない。(3a)の話者たちは博士ではなく武道の師匠だが、弟子たちから敬われる白髪の老人であり、「博士語」の話体を用いている。スペイン語訳(3b)には、そのような特徴はなく、老人らしい言葉遣いの中に「センス」という外来語が交って生まれるユーモアは映し出されていない。

このように、スペイン語では「博士語」に相当する統語・形態・語彙形式は一般的ではない。

3. 「お嬢様語」

「お嬢様語」の例を小説に求めてみよう。

- (4) a. 姉娘：あら多々良さんの頭は御母さまの様に光かってよ。

母：だまっていらっしゃいと云うのに。

妹娘：御母さまタベの泥棒の頭も光かってて。[sic]（夏目漱石『吾輩は猫である』5, 1905）

- b. —¡Hala!... La cabeza de Tatara brilla como la de mamá.

—¡Te digo que calles!...

—¿La cabeza del ladrón que entró anoche también brillaba?（「あら、多々良の頭はお母さんのそのように光っています」「黙りなさいと言うのに！」「タベ入った泥棒の頭も光っていませんか？」）

（Jesús González Valles訳, *Yo soy un gato*, 1974, 清泉女子大学, p.174. 改訂版, *Yo, el gato*, 1999, Trotta, Madrid, p.185）²

- (5) a. 没落貴族の娘：そんな事は、ありませんわ。私は、お酒飲みを見た事があるんですもの。まるで、違いますわ。（太宰治『斜陽』, 1947; 1950, 新潮文庫, p.77）

- b. —No es cierto. Yo he visto cómo es un bebedor de verdad. Es completamente distinto.（それは事実ではありません。本当の酒飲みがどのようなであるか、私は見たことがあります。全く違います。）

² なお、『吾輩は猫である』には、もう1つスペイン語訳がある（Montse Watkins 訳, *Soy un gato*, 1996, 現代企画室）が、抄訳であり、この部分は省かれている。

(Montse Watkins 訳, *El ocaso*, 1999, 現代企画室, p.67)

(4a) の娘たちは、母親を「御母さま」と呼び、動詞テ形を文末部に用いている。
(5a) の話者は「です・ます」の後に「わ」「もの」を加えている。どちらも話者の育ちの良さ、上品さが表れた話体である。スペイン語訳(4b), (5b)は、原文の内包を正しく映しているが、話者に関する外延は一切伝えていない。

「博士語」と同様、スペイン語では「お嬢様語」に相当する統語・形態・語彙形式は一般的ではないと言える。

4. 性差による話体の違い

性差による話体の違いは、日本語では実際の言語使用に普通に認められる。従って「男性語」「女性語」は「役割語」ではないが、話者についての情報を手短かに提供できるので、漫画や小説では「役割語」と同じく多用されている。これがスペイン語訳ではどう扱われるか、この機会に触れておきたい。

(6) a. ブルー将軍：いいこと 隊をふたつにわけろわ！ いいわね！（鳥山明『ドラゴンボール』6, 1987, 集英社, p.166)

b. —Escuchad. ¡Nos dividiremos en dos grupos! ¿Entendido? (お前たち、聞きなさい。私たちは2つのグループに分かれよう。分かったな?) (*Dragon Ball*, 6, 1995, Planeta, Barcelona, p.166)

(7) a. ナミ：ハア... 私!!! 実は“男”なんだぜ!!! (尾田栄一郎『ワンピース』47, 2007, 集英社)

b. —Arf... ¡¡¡Yo...!!! ¡¡¡En realidad soy un hombre!!! (ハアハア... 私は！実は男だ！) (*One Piece* 47, Planeta, Barcelona)

(6a)の話者はたくましい男性だが、常に女性的な話体を用いる。その違和感がこの人物の大きな特徴だが、(6b)のスペイン語訳は無標の文で、話者の性別に関する情報は全くない。(7a)の話者は若い女性だが、この場面では方便として「自分が男性である」と偽る。文頭の「私」が女性的なのに、「なんだぜ」という文末が男性的な話体になっている。(7b)のスペイン語訳では、この機微は表現されていない。

スペイン語でも性差が言語使用に反映しないわけではない。³ それについての研究も、López García 他(1991), Lozano (1995), 坂東 (1995), García Mouton (1999), Calero Fernández (1999)など、かなり行なわれている。しかし日本語ほどその差は顕著ではなく、「役割語」的な利用もされないと言えるだろう。

5. 「非標準語」

日本語では、田舎言葉、関西方言など、さまざまな非標準的な話体が、話者の特徴を際立たせる「役割語」として漫画などで用いられる。⁴ 小説に方言が用いられる場合を検討しよう。

(8) a. 小十郎：熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射たなけあならねえ。(宮沢賢治「なめとこ山の熊」, c1934; 1961, 『風の又三郎』所収, 新潮文庫, p.149)

b. —Oso, no creas que te maté porque te odiaba. Tengo que ganarme así la vida. (熊よ、私がお前を憎くて殺したとは思うな。私はこうして生活費を稼がねばならないのだ)(Montse Watkins 訳, “Los osos del Monte Nametoko”, 1996, *Historias mágicas* 所収, 現代企画室, p.116)

(9) a. 「マリアさまやおへんの？」と、その時、千重子は、「北野の天神さんに、よう似た大きいのがありましたえ」

「これはキリストやそうな」と、父はあっさり言った。「赤子抱いてやはらへん」(川端康成『古都』, 1961-62; 1968, 新潮文庫, p.6)

b. —¿No será la Madre de Dios?— preguntó Chieko—. Cerca de la capilla Tenjin de Kitano, vi una gran imagen de María que se parece a ésa.

—Tiene que ser Cristo— dijo el padre, tajante—. No lleva al Niño

³ たとえば「女性は誇張した表現を多用する傾向がある」「女性の発話のほうがピッチが高い」といった指摘が複数の研究者によってなされている。形態統語論的には、名詞・形容詞類の女性形語尾が話者の性差に関与することがある。例：(i) *Estoy cansado*. (私は疲れている。)(話者は男性) (ii) *Estoy cansada*. (同義)(話者は女性)

⁴ なお、日本語の「キャラ語尾」(金水, 2003: 188. 特定のキャラクターに与えられた語尾)は、スペイン語訳では通例、考慮されない。たとえば、岸本斉史『ナルト』の主人公ナルトの「…てばよ」や、尾田栄一郎『ワンピース』の登場人物モズ・キウイ姉妹の「…わいな」というキャラ語尾は、市販のスペイン語版では訳出されていない。

en sus brazos. (「神の母ではありませんか？」と千重子は尋ねた。「北野の天神のお堂で、私はそれに似た大きなマリア像を見ました」「キリストに違いない」と父はきっぱりと言った。「腕に幼な子を抱いていない」)(Ana María de la Fuente 訳(ドイツ語訳からの重訳), *Kioto*, 1982, Ediciones G.P., Barcelona, p.11)

(8a)は岩手県の猟師が撃ち殺した熊に向かって言う台詞、(9a)は京都に生まれ育った父と娘の会話である。これらの文学作品中の方言の使用は、登場人物を安易に類型化するためではなく、表現効果を高めるのがねらいであって、典型的な「役割語」ではないが、どちらも、その地域特有の言葉遣いが鮮明に出ている。しかし訳文はごく標準的なスペイン語であり、地域性は失われている。

では、方言そのものを話題にした文脈の場合は、どうだろうか。

(10) a. 「べらぼうめ、イナゴもバッタもおなじもんだ。だいいち先生をつかまえて、『なもし』たなんだ。菜飯は田楽のときよりほかに食うもんじゃない」とあべこべにやりこめてやったら、「なもしと菜飯とはちがうぞなもし」といった。いつまでいっても、「なもし」を使うやつだ。(夏目漱石『坊っちゃん』, 1906; 1980, 新潮文庫, p.35)

b. —¡Idiota!... langosta y saltamontes... es lo mismo. En primer lugar, ¿qué es eso de decir al maestro *sepa usted*? La sopa de arroz con verduras sólo se come cuando los campesinos bailan la danza *dengaku*— expliqué irónicamente para imponer respeto.

—Pero *sepa usted* que *sepa* y *sopa* son cosas distintas— insistió.

Aquel tipo también tenía la manía del *sepa usted*. (「愚か者!... イナゴとバッタは同じだ。そもそも先生に『セパ・ウステ (あなた, 知っておきなさい)』と言うのはどういうことだ? 野菜入りの米の『ソパ (スープ)』は農民が田楽踊りを踊るときにだけ食べるものだ」と、私は敬意を受けるべく、皮肉をこめて説明した。「でも『セパ・ウステ (あなた, 知っておきなさい)』, 『セパ (知っておきなさい)』と『ソパ (スープ)』は別のものです」と、彼は言い張った。この男も「セパ・ウステ」が口癖になっているのだった。)(Jesús González Valles 訳, *El joven mimado*, 1969, Sociedad Latino-Americana, 東

京, p.68)

- c. —¡Brutos! Un cigarrón o un saltamontes, ¿qué más da? Y lo primero de todo, ¿qué es eso de dirigiros a un profesor empezando a hablar con un “Pué sé”? Todavía, si fuera “Puede ser...”, eso valdría para comenzar una frase, como cuando se dice: “Puede ser que ser campesino signifique saber preparar el arroz con verduras fritas, típico en los festivales de danza Dengaku”.

Mediante este sofisticado juego de palabras, yo trataba de rebatirles y apabullarles. Pero uno de ellos me salió con esto:

—O sea, que “pué sé” y “puede serrer” no son lo mismo. Sí que pué sé así como usted dice.

¡Que el infierno me trague! Por mucho que les dijera a estos adoquines, continuarían con su “pué sé” hasta siempre jamás. (「粗野な奴らめ！イナゴだろうがバッタだろうが，どう違うのか？そしてまず，先生に向かって『プエ・セ（かもな）』という言葉遣いをするのはどういうことだ？『プエデ・セール（かもしれません）』というなら，まだしもだ。それなら『農民であることは，田楽踊りの祭りに出る炒め野菜入りの飯の料理が上手だということになるかもしれません』のような文を作るのに使えるだろうに」私はこの洗練された言葉遊びによって，彼らを打ちのめし参らせようとした。しかし彼らの1人がこう言い放った。「つまり，『プエ・セ』と『プエデ・セールルル』は同じではないのですね。確かにあんたが言うとおりの『プエ・セ（かもな）』私は地獄に呑み込まれたい！この愚鈍な連中にどんなに言っても，彼らは『プエ・セ（かもな）』と言い続けることだろう。」）(Fernando Rodríguez-Izquierdo 訳, *Botchan*, 1997, 現代企画室, pp.62-63)

- d. —¡Esto es absurdo! Saltamontes, langostas, ¡qué más da! ¿Y quiénes creéis que sois para usar ese estúpido *¿verdad que sí?*, cada vez que os dirigís a un profesor? ¿Es que no os basta con un *no*? ¡Habláis como niños!— Pensé que esto los haría callar, pero

enseguida me respondieron:

—Pero *¿verdad que sí?* y *¿no?* no son la misma cosa, *¿verdad que no?*

¡Era inútil, no había forma de que dejaran de torturarme con aquel *¿verdad que sí?* o *¿verdad que no?* cada vez que abrían la boca! (「これは愚かしい！ バッタかイナゴかなどどうでもいい！そして君たちは先生にもの言うたびに、その愚かな『そうでしょ？』という言葉遣いをするが、どういうつもりだ？『ね』で十分じゃないか？君たちは子どものような話し方をしている！」私はこれで彼らをやりこめられるだろうと考えた。しかしたちまち彼らは私にこう答えた。「でも『そうでしょ？』と『ね？』は同じじゃありません。そうでしょ？」無理だった！彼らが口を開くたびに、その「そうでしょ？」で私を苦しめるのをやめさせる方法はないのだった！) (José Pazó 訳, *Botchan*, 2008, Impedimenta, Madrid, pp.84-85)

『坊っちゃん』には3種のスペイン語訳が出ている。江戸っ子の主人公が伊予方言の文末詞「(ぞ) なもし」の使用を非難する場面は、方言を無視しては訳出できない。(10b)は「なもし」に *sepa usted* (あなた、知りなさい) という語句を充てた。*usted* は *usted* の語末子音が消失した形で、粗野な響きがする。(10c)では *pué sé* が選ばれている。これは *puede ser* (かもしれない) の語末音節および語末子音が脱落した形で、同じく粗野な発音とされる。(10d)では、同じ箇所が *¿no es verdad?* (そうでしょ?) と訳されている。標準的な形式だが、濫用すると自分の発言をいちいち聞き手に追認してもらうことになり、自信のなさそうな、児童語のような印象を与える。

いずれも工夫を凝らした訳であるが、「主人公から見て洗練されていない語法」というニュアンスを最も良く伝えているのは、(10c)であろうと思われる。(10c)は更に *asín* (標準形は *así*)、*usté* (標準形は上述のとおり *usted*) のような粗野な語形を用いて、方言らしさを強調している。⁵

⁵ なお、この下り全体が読みやすい訳文になっているか否かは別の問題である。(10b)は「なもし」に「菜飯」をかけた言葉遊びを忠実に訳そうとして、分かりづらくなった。(10c)は非

言うまでもなく、スペイン語には多くの方言が存在し、「役割語」として表現されることもある。たとえば次の発話は、1949 年から連載されているチリの短編漫画 *Condorito* の中で、アルゼンチン人のウンヘニオが行なっているものだが、文中の *pibe*（子ども）という語彙、*te acordás*（君は思い出す）という動詞形式はアルゼンチン語法である。この語法はチリのスペイン語には見られないものであり、話者がアルゼンチン人であることを示す「役割語」の機能を果たしている。

- (11) Ungenio: —¡Veo a esos pibes y... me acuerdo de mis hijos, me acuerdo! (...) ¿Ves a esa mujer y te acordás de Yayita, eh? (ウンヘニオ: あの子どもたちを見ると、我が子を思い出すねえ! (…)) 君だって、あの女性を見て (恋人の) ヤイータを思い出すだろう?) (René Ríos, *Condorito*, 3390, *International Press, Edición en Español*, 2004 年 9 月 4 日, p.B-8)

しかし他言語からの翻訳にあたり、特に必要のない場合は、原語の方言をスペイン語の何らかの方言に移し替えること（たとえば関西方言をアンダルシア方言に）はせず、標準的な話体で訳するのが一般的であると言える。

6. 「武家語」

日本語にでは、話者が武士であることを示す「武家語」がある。スペイン語はどうか。

- (12) a. 武士: おのれ… 愚弄しおったな! 覚悟せい 坊主! (井上雄彦『バガボンド』2, 1999, 講談社, p.72)
- b. —Imbécil... ¡Me has insultado! ¡Prepárate, monje! (愚か者! … お前は私を侮辱したな! 僧侶よ、覚悟しろ!) (Lumi Tamara Barabino & Agustín Gómez Sanz 訳, *Vagabond* 2, 2003, Ivrea, Barcelona, p.72)
- (13) Capitán Trueno: —¡Es inútil que grites! ¡No te queda más remedio que enfrentarte conmigo! (雷将軍: 叫んでも無駄だ! お前には、私

常に丁寧な訳だが、説明的で、原作の洒脱な筆致から遠ざかってしまっている。(10d)は生徒の粗野さを稚氣に移し替え、「菜飯」の話題を切り捨てるといふ、思い切った意識をして、読みやすいスペイン語にすることに成功している。

に立ち向かう以外に方法はない！) (“La muerte de Sigrid”, *El Capitán Trueno*, Año 1:12, 1986, Barcelona, p.11)

(12a, b)の内容は、いかにも武士が言いそうなことだが、(12b)は形式的には特徴のない、標準的な文である。(13)は、1956年から現在まで連載が続くスペインの人気活劇漫画の一場で、主人公（中世の戦士）が悪人を追いつめて言う台詞である。形式からは、話者の特徴に関する手がかりは得られない。

しかし作品によっては、昔の貴族や戦士が古風な語法を用いている場合がある。

(14) Caballero: —El acero de mi espada en vuestra piel asquerosa será mi recompensa. ¡Apartaos! (騎士：そなたのおぞましい皮膚に向けた私の剣の鋼が、私からの答えだ。そこを離れよ！) (Walt Disney, “La espada y la rosa”, *Aventuras* 10, 1964, Zig-Zag, Santiago de Chile, p.4)

(15) Dragón Rojo: —Vos me la enseñasteis, divino maestro. De vos aprendí cuanto sé y cuanto soy. (赤龍：尊師様、あなた様が私にそれを教えて下さいました。私の知っていることも、今の私も、全てあなた様から学びました) (“El Dragón Rojo. Los monjes de Harka”, *Kung-Fu*, 51, 1981, Amaika, Barcelona, p.23)

(16) Reportero romano: —¡Ave, gran Condórium! (古代ローマの新聞記者：こんにちは、偉大なるコンドリウムよ！) (René Ríos, “Condorito”, 5988, *International Press, Edición en Español*, 2008年8月30日, p.B-6)

(14)はヨーロッパの中世の騎士が、よこしまな高僧を剣で脅すときの台詞であり、(15)は大航海時代の東洋の武道の達人 Dragón Rojo（赤龍）が師匠に再会した場面での発言である。ここには vos という古い敬称代名詞とその対応形が用いられている。(14)では vuestra という所有詞が、また(15)では動詞 enseñar（教える）の直説法点過去 enseñasteis が、それぞれ 2 人称単数形として働いている。この中世から近世にかけての語法は、それらの時代を舞台とする作品でしばしば用いられ、日本語の「武家語」のような「役割語」の働きを担っていると考えられる。

また、(16)のように、古代人の話体を表す「役割語」も存在する。これは先述

の(11)と同じくチリの漫画の、古代ローマを舞台にした作品の中の発話である。主人公Condoritoの名前がCondóriumというラテン語めいた形に改められ、aveというラテン語のあいさつが使われている（Condoritoはコンドルなので、ave〈鳥〉との掛け言葉にもなっている）。⁶

以上のように、スペイン語には「昔の人の話体」を表す「役割語」が、形態統語論（例：古い敬称とその対応形、ラテン語的屈折語尾）、語彙論（例：ave）のレベルで認められる。

7. 「異人語」

「異人語」は、スペイン語にも豊富に認められる。

(17) Mortadelo: —¡Jefe, “Moltadelo venil de espial el balio chino”! (モルタデロ：ボス、モルタデロ、中華街をスパイしてきた！) (Francisco Ibáñez, *Mortadelo y Filemón* 122, 1995, Ediciones B, Barcelona)

(18) Chino 1: —La Melody está por Manolito. ¿Tú sabel?

Chino 2: —Yo sabel. (中国人1：「メロディー、マノリート好き。お前、知る？」 中国人2：「私、知る」) (Elvira Lindo, *Los trapos sucios de Manolito Gafotas*, 1997, Alfaguara, Madrid, p.143)

(19) Norteamericano: —¡Uh! Spain llevar very mal lo de la crisis, ¿eh? ¡Mira qué taxi más pequeño!

Norteamericana: —Oh yes, darling! And además sucio! (米国人男性：「ああ！スペイン経済危機、ベリー悪いね。何て小さなタクシーか見てごらん！」 米国人女性：「おお、イエス、ダーリン！ アンドその上、汚い！」) (Francisco Ibáñez, *Mortadelo y Filemón* 144, 2011, Ediciones B, Barcelona, p.31)

(20) Americano nativo: —Tú ya no regresar al fuerte... (...) ¡Ah! ¡Esta vez tú no librarte! (ネイティブアメリカン：お前、もう砦に帰らない。(…) ああ！ 今度はお前は助からない！) (“Una aventura en el Oeste”, *TBO* 5, 1988, Ediciones B, Barcelona, p.22)

⁶ 細川（2011：161-165）は、フランスの漫画 Asterix のドイツ語訳を用いて、ドイツ語でもaveを古代ローマ人の「役割語」として用いる場合があることを指摘している。

(21) a. 人造人間 8 号：名前なんという？ (…) いちばん上の階いくの たぶんむずかしい オレつれていってあげる (鳥山明『ドラゴンボール』6, 1987, 集英社, pp.48-49)

b. —¿Cómo llamarte tú? (...) Quizás ser difícil llegar al último piso. Yo ir contigo. (お前、名前なんという？ (…)) たぶん一番上の階に着く、難しい。私、お前と行く) (*Dragon Ball*, 6, 1995, Planeta, Barcelona, pp.48-49)

(17)～(21)では共通して、動詞を活用形でなく、不定詞のままで使用し、主語は主格人称代名詞であっても略さず動詞の前に置いている。これが「異人語」の特徴である。東洋人の発話は、これに加えて、(17), (18)のようにr, rrがlに置き換えられる (Mortadelo > Moltadelo, venir > venil, espiar > espial, barrio > balio, saber > sabel)。 (17)はスペインの人気漫画で、中国人に変装したスペイン人諜報部員が、上司に調査の報告をしようとする場面である。話者自身を1人称代名詞ではなく、Moltadeloという非標準的な発音の固有名詞で表現している。⁷

(18)はスペインの児童ユーモア小説の挿絵に書き込まれた発話である。頭に笠をかぶり、弁髪を垂らし、細い目をした発話者たちは、La Melody という、洗礼名に定冠詞をつけた、垢ぬけしないとされる語法を用いている。動詞 *está* は不定詞ではなく活用形であり、前置詞 *por* は *pol* とはなっておらず、「役割語」の適用は不徹底である。これは、最低限は標準的な話体を保っておかないと、理解不能になるからであろう。

(19)は(17)と同じ作品の一場面で、スペインを観光で訪れた米国人夫婦が実態を誤解しての発話である。Spain, yes, darling, and といった、スペイン人読者にも容易に理解できる語彙は英語で表される一方、¡Mira qué...! (何て…か見てごらん!) のような複雑な構文が、手を加えることなく用いられている。このような、実際の非母語話者が用いそうもない架空の話体は、「役割語」としての資格を十分に備えていると言える。また倒立感嘆符の使用の有無にも配慮が及んでいる。

(20), (21)は、不定詞の使用や、主語の表出が見られる、典型的な「異人語」の例である。

⁷ 山口 (2007: 16-19) は、『ハリー・ポッター』に登場するしもべ妖精ドビーの発話を例にあげて、英語にも同様の現象があることを指摘している。

8. 発声困難な話者の発話

以上見てきたように、日本語の原作の有標の話体は、スペイン語に訳すときは、一部を除いて無視されることが多い。ところが中には、スペイン語でも特異な形式に訳出される傾向の強い事例がある。それは、次に示すような、発声に何らかの困難があって、不明瞭な発話が生じる場合である。

(22) a. ルフィ：…なカバ（仲間）…ダンダよ（尾田栄一郎『ワンピース』
16, 2000, 集英社）

b. —¡Ezos... (¡Ellos...) ...so mis compaeos! (...son mis compañeros!)
(かせらは（彼らは…）…私のなかばで（…私の仲間です））（*One Piece* 16, Planeta, Barcelona）

(23) a. ココロ婆さん：海賊の仕業？ んががが おめェ本気れそう思っ
てんのかい？（尾田栄一郎『ワンピース』 36, 2005, 集英社）

b. —¿Obga de unos pigataz? Gua, gua, gua. ¿Y tú cgeez gealmente
que zea ezo? (かいごくのしばら？ グア，グア，グア。で，お前は
ごんとうにぞうだどおごっていくのか？) (*One Piece* 36, Planeta,
Barcelona)

(22a)は、瀕死の仲間たちをかついで雪山を登った主人公が、医師に治療を頼む台詞である。寒さと疲労のため、「彼らは仲間なんだよ」と伝えたくても、思うように子音が発音できない ($m > b$, $n > d$)。スペイン語訳(21b)では、子音の交替 ($ellos > ezos$) や脱落 ($son > so$, $compañeros > compaeos$) で、これを表現している。また、(23a)の話者はアルコール依存でろれつが回らず、 $d > r$ などの有標の発音をする。スペイン語訳(23b)は、本来 ¿Obra de unos piratas? Jua, jua, jua. ¿Y tú crees realmente que sea eso? と表記されるべき文であり、 $[r] \cdot [R] > [x]$, $[s] > [\theta]$, $[x] > [g]$ という、日本語の原文よりも徹底した子音交替が行なわれている。

9. 考察と結論

ここまでの観察から、スペイン語における統語・形態・語彙的な「役割語」は次のようにまとめることができる。

- (24) a. 「博士語」：一般的ではない。
b. 「お嬢様語」：一般的ではない。
c. 性差による話体の違い：一般的ではない。
d. 「非標準語」：存在する。方言の特徴を誇張して表現。しかし他言語からの翻訳では、必要のない限り、使用されない。
e. 昔の人の話体：存在する。中世・近世：古い敬称 *vos* とその対応形式。古代：ラテン語的屈折語尾、ラテン語の語彙の混入。
f. 「異人語」：存在する。不定詞の使用。主格人称代名詞の表出。「主語＋動詞」の語順。これに加えて、東洋人は *r > l* の子音交替。英語母語話者は英語語彙の混入。
g. 発声困難な話者の発話：存在する。子音交替、脱落。

このように、スペイン語では、「博士語」、「お嬢様語」、「男性語・女性語」のような「役割語」は一般的でないが、「非標準語」はときとして用いられ、「武家語」などの昔の人の話体はかなり一般に用いられる。「異人語」や、発声困難な話者の発話を表す「役割語」は、一般に用いられる。山口（2007）、細川（2011）の記述する英語、ドイツ語の「役割語」と比較すると、スペイン語の「役割語」は一般性が高いようであるが、日本語よりは種類が少なく、使用の度合いが低いと言える。

しかし、この結論は漫画や文学作品など、文字言語を対象とした考察から導かれていることに注意が必要である。音声言語では、抑揚やピッチ、発話の速度、音色などの音声要素を大いに生かしてフィクションの話者の特徴づけが行なわれる。実際の話者の姿が直接、または間接的に視覚で確認できる場合には、ジェスチャーなどの非言語要素も「役割語」として利用される。たとえば「博士語」は、低いピッチ、しわがれた声、重々しい口調、咳払いの挿入などによって、また「お嬢様」は高いピッチ、きどった口調、笑い声の挿入などによって表現される。形態統語的「役割語」が発達している「異人語」の場合にも、その使用に加えて、たとえばロボットの発話は、平板な抑揚、*¡Bip, bip!* のような電子音をまねた擬声語の挿入などを利用し、また東洋人の発話は、目を細め、前歯を突き出して行かない、カリカチュアライズされた人物を演じて、表現効果を高めるのが一般的である。従って、スペイン語の「役割語」の考察は、音声要素や非言語要素をも対

象に含めるべきである。

スペイン語の「役割語」における音声要素・非言語要素の重要性は、(24g)「発声困難な話者の発話」の領域に現れている。この領域の「役割語」は、時として日本語より積極的に使用されることは、先述のとおりである。

この現象は、次の2つの現象と関係があると思われる。第1に、スペイン語には、日本語に比べ定型化した擬声語は少ないが、口語では非言語的音声が多用される。たとえば、象の鳴き声は「パオー」のような言語記号化した形では表さず、この動物の声に極力似せた非言語的な音声で表現する。また、発話の中に口笛や舌打ちを混入させることも多い。

第2に、スペイン語には、次のような、日本語には見られない形式のことわざが存在する。

(25) a. Dijo la sartén al cazo: “Quita, que me ensucio.” (フライパンが手鍋に言った、「立ち退け。汚れてしまう」と。)

b. Dice el puerco: “Dame más”; dice el amo: “Ya verás”. (豚が言う、「(食い物を) もっとよこせ」と。飼い主が言う、「今に分かるさ」と。)

(25a)は「五十歩百歩」、(25b)は「知らぬが仏」に相当する教訓だが、ともに直接話法の形になっていて、さらに(25a)には過去形、(25b)には対話が用いられている。これは、日本語のことわざの類型には見られない形式である。このような物語的な、あるいは演劇的なことわざを音声言語で伝える場合は、物語の語り手、あるいは演劇の演技者のような語調が用いられる。このようなスペイン語の擬声語、ことわざにおける音声要素、非言語的要素の占める位置の大きさは、この言語の「役割語」におけるそれらの要素の重要性と軌を一にすると考えられる。

以上の考察をまとめ、次の2点をもって本稿の結論とする。

(26) a. スペイン語の文字言語における「役割語」は、(24a-g)のように記述できる。

b. スペイン語の「役割語」は音声要素、非言語要素とも大きく関わっている。

山口(2007: 23)が言うとおり、「役割語」は「通り一遍のステレオタイプの把握になろうとも、物語を効率よく提示する」という普遍的な導入動機を持つ。ス

ペイン語は、文字言語よりも音声言語の領域でこの要請に応えることができる言語であると言える。その音声的、非言語的要素は体系的把握、記述が困難ではあるが、今後も関心を持ちつづけていきたい。

参考文献

- 坂東省次 1995 “Un estudio preliminar de lingüística de sexo de los idiomas japonés y español”, 『京都外国語大学イスパニア語学科創設 30 周年記念論文集』, pp.147-163.
- Calero Fernández, María Ángeles 1999 *Sexismo lingüístico —Análisis y propuestas ante la discriminación sexual en el lenguaje—*, Narcea, Madrid.
- Gallego Zambrano, Emilio 2003 「スペインにおけるアニメ・漫画の言語政策」, 『日本語学』2003 年 11 月号, pp.76-77, 明治書院。
- García Mouton, Pilar 1999 *Cómo hablan las mujeres*, Arco / Libros, Madrid.
- Gaubatz, Thomas Martin 2007 「小説における米語方言の日本語訳について」, 金水・編 (2007), pp.125-26.
- 細川裕史 2011 「コミック翻訳を通じた役割語の創造 —ドイツ語史研究の視点から—」, 金水・編 (2011), pp.153-170.
- 鄭 恵先 2007 「日韓対照役割語研究 —その可能性を探る—」, 金水・編 (2007), pp.71-93.
- 鄭 恵先 2011 「役割語を主題として日韓翻訳の実践 —課題遂行型の翻訳活動を通しての気づきとスキル向上—」, 金水・編 (2011), pp.71-90.
- 金関あさ 2010 「スペインにおける日本のポップカルチャー」, 坂東省次・川成 洋・編『日本・スペイン交流史』, れんが書房新社, pp.404-419.
- 金関あさ 2011 「日本のポップカルチャー」, 坂東省次・川成 洋・編『スペイン文化事典』, 丸善, pp.94-95.
- 金水 敏 2003 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店。
- 金水 敏・編 2007 『役割語研究の地平』, くろしお出版。

金水 敏・編 2011 『役割語研究の展開』, くろしお出版。

López García, Ángel & R. Morant (1991) *Gramática femenina*, Cátedra, Madrid.

Lozano, Irene 1995 *Lenguaje femenino, lenguaje masculino. — ¿Condiciona nuestro sexo la forma de hablar?—*, Minerva, Madrid.

恩塚千代 2011 「韓国の教科書における役割語の役割 —「生きた日本語」を教えるバーチャルリアリティー」, 金水・編 (2011), pp.51-70。

山口治彦 2007 「役割語の個別性と普遍性 一日英の対照を通して」, 金水・編 (2007), pp.9-25。

拙稿 2009 「イスパニア語に翻訳された日本文学に関する一考察」, 『神戸外大論叢』 60:1, pp.65-83, 神戸市外国語大学。